

『生徒に求愛されてます♥』

著：高月まつり

ill：こうじま奈月

「食堂のおばちゃんに聞いたら、先生がまだ食べに来てないって言ったから」

「あ、ああ、うん。すまないな瀬野。上がるか？」

意味深な笑みを浮かべてさっさと出て行った高見に困った顔を見せた後、鈴原は瀬野に笑顔で声をかける。

「じゃあ、お邪魔します……」

瀬野がこの部屋に来たのは今日が初めてではない。

今まで何度も、「分からないところを教えて！」と個人授業をねだりにやってきた。そのたびに鈴原は、「教師のプライバシーをどうしてくれる」と怒りながらも教えた。教師と生徒が必要以上に親しくなるのは如何なものかと思っているので、なるべく冷静に対処しようと思っているのだが、瀬野は甘えるのが上手くて、今のところいつも失敗している。

「あの」

「ん？」

「先生……酒臭いんだけど」

「あー……高見先生が、缶ビールを持ってきてくれたからな」

プライベートなのでアルコールが入っても問題ない。問題になるとしたら、鈴原が中身の入った缶ビールを持って、酔っ払いながら生徒のいる食堂や自習室に現れることだ。

「大人の時間ってヤツか……ねえ先生」

柿の種を皿に移動させたローテーブルに、今夜の夕食が置かれる。

ほこほこと湯気の立っているトンカツの卵とじ、ポテトサラダ、大根とキュウリの漬け物。どんぶり飯に具沢山の味噌汁。育ち盛りの男子高生の量だが、とにかく旨い。理事会は、旨い食べものが日々の生活の中でいかに大事かをちゃんと分かっている。

「おー……今日は凄いな。人気メニューじゃないか」

「旨かったよ。だから先生も、冷めないうちに食べな」

「そうするわ。わざわざ持ってきてくれてありがとうな？ 瀬野。冷蔵庫にアイスが入ってるから食べていいぞ？」

「俺、子供じゃないし。アイスがほしくて先生のご飯を持ってきたわけじゃない」

「だったら、あとで高見先生に渡す」

「喜んでいただきます！」

子供じゃないか。可愛いなあ。

ファッション雑誌のモデルの写真だとずいぶん大人びて見えるが、風呂上がりの濡れた髪でTシャツにジャージ姿だと、年相応の子供だ。

「この、チョコのアイス食べていい？」

「いいぞ。俺、バニラの方が好きだし」

「俺がチョコアイスが好きだって知ってて、買っておいでくれたとか？」

「なにその、意味不明の前向き発言」

鈴原は「ぷはっ」と笑って、瀬野が持ってきてくれた夕食に箸を付ける。

トンカツの卵とじと言っても、グツグツ煮込まれているわけではないので、カツはサクリ、それでいて卵はぷるぷるの半熟で、口の中で肉と卵と濃いめの出汁が合わさるとたまらなく旨い。

ああ厨房の調理師さんたち、本当にいつもグッジョブと思いながら、次に具沢山の味噌汁を飲む。味噌味にゴロゴロと入った根菜と豚肉の細切れがよく合う。これだけでご飯のおかずになりそうだ。

「ふう」と一息ついて、今度はポテトサラダを頼張った。ジャガイモとタマネギとハムだけのマヨネーズとちょっぴりの胡椒で味付けられたシンプルなポテトサラダには、輪切りのキュウリとスライスしたリンゴが添えてある。

鈴原はリンゴやミカンの入った少し甘酸っぱいポテトサラダが好きだが、それを生徒たちに言ったら「邪道だ」「先生にはガッカリだ」と散々な言われようだったが、それでも、スライスしたリンゴの上にポテトサラダを乗せて食べることはやめられない。果物の爽やかな甘味と、マヨネーズの酸味が凄く合うのに、どうして生徒たちは分かってくれないんだろうかと、いつも思っていた。

「先生、美味しい？」

「ああ。旨いわ。これで土日も食事が出てくれれば最高なんだがな。昔から土日は休みなんだよ」

「土日の自炊は、もう慣れました」

「だよな。三年だもんな」

寮の食堂は月曜から金曜までで、土日と祝祭日は休日になる。そのため、食堂の横には自炊できるスペースと各棟ごとの冷蔵庫があった。

職員は自分の部屋で自炊をし、生徒たちは己の自主性を試される。

みな「米さえ炊けばあとはどうにでもなる」を合言葉に米を炊き、レトルト食品や缶詰を乗せた即席の丼ものを作ったり、数人で協力してカレーを作った。一年生の最初のうちは辛いけど、半年も経つと慣れてきて寮生活を楽しめる。鈴原も昔はそうだった。

「先生も、さんおーのOBだもんねー」

アイスを食べながら鈴原の横顔をじっと見つめていた瀬野が、驚いている。

「おう。俺はお前らの先輩の一人だ。ちなみに、昔はバレない門越えの仕方があったんだ」

門越えとは、門限を無視して麓の町まで遊びに行くことで、現在は優秀なセキュリティーシステムで誰一人として成功していない。

「マジですか……」

「センサーと防犯カメラが干渉し合っただけで死角になる場所があっただけ。何度か使わせてもらった。懐かしい」

「昔の生徒は何をやってるんですか。せつかくこの学校に入ったんだから停学や退学になるようなことはしませんよ。そんなことになったら、鈴原先生とも会えなくなる」

瀬野の熱い視線をスルーして、「そういやお前、ここに入った理由が制服だったよな」と笑った。

「服がお洒落ってというのは大事だと思います」

「それだけで山桜に入れたってのが凄いよな。ここの偏差値は高い」

「俺はキラキラしているだけでなく、ちゃんと努力もしている美形だって、ようやく理解してくれました？ しかも、愛してる相手のために夕食まで持ってくる気配り。最高の恋人になれます。ね？」

アイスを嚙りながら「ね？」と小首を傾げられても、ただの男子高校生なら大して可愛くない。だが相手は瀬野なので、その破壊力は凄まじかった。

鈴原はあやうくドンブリを落としそうになって、すんでのところまで堪える。

「その手前味噌はなんなんだ。アピールのしすぎは逆に反感を買うぞ」

「……鈴原先生は俺が嫌いになった……？」

「ならないよ、大事な可愛い生徒の一人だ」

「ああもう、そのセリフ、俺は大嫌いですよー！」

瀬野は勢いよく立ち上がると、今度は鈴原のベッドにダイブする。

「おいこら、アイス！」

「もう食べ終わった……。いいなあ、先生たちのベッドって寝心地がいい。このまま泊まりたい。そうだ、俺は泊まっていこう」

「ふざけるな」

鈴原は箸をトレイに置き、瀬野の右手からアイスの棒を奪ってゴミ箱に捨てた。

「さっさとベッドから下りて、自分の部屋に帰りなさい」

「……鈴原先生の匂いがするベッドから下りたくない」

「……俺はお前を可愛い生徒だと思っているが、今の状態では、言うことを聞かなくて面倒臭い生徒に格下げするしかないぞ？ 瀬野。第一、俺はお前のクラスの担任なんだから毎日会っているだろう？ あれもこれもと欲張りすぎるのはいかんと思う」

瀬野はゆっくり起き上がって、乱れた前髪を掻き上げながら鈴原を見た。

「分かってる。でも俺は、ほしいと思ったものは今まで全部手に入れてきた。……ねえ、ここまできたら、一度ぐらいは俺にほだされてみない？」

「俺は物じゃないぞ」

「分かってる。頑固で手強い。でも俺、あんたに一目惚れしちゃってるから、イエスの返事をもらうまで、何回だって告白します」

「無理だぞ」

「やってみなきゃ分かんないでしょ。だって先生が俺の顔を好きなの分かってるし」

ああうん。確かにそうだな。お前の顔は大好きだ。でもお前は今生徒だから、それ以外の感情についてはノーコメントだ。制服姿で一人で写っている写真がほしいよなあ。毎日見ても飽

きない綺麗な顔。

鈴原は肩を竦めて「そうだな」と認める。

「やっぱりね。でも好きなのは顔だけじゃないよね？」

「そういう面倒臭いことを言う生徒は嫌いになるぞ」

「またそんなことを言う。だったら……ちょっとその、お試してみたいな感じで……」

瀬野が手を伸ばして、鈴原の腕を掴もうとして失敗する。

彼の指先が触れたのは、鈴原の胸だった。

Tシャツ越しではあったが、彼の指先が左乳首を引っ掻いた。

「……っ！」

声を我慢したのは本当に偉いと思う。自分を褒めたい。だが、両手で胸を押さえてしまったのは失敗だった。

「先生……ねえ、ちょっと、いいかな？」

瀬野の喉がごくりと鳴るのが分かった。鈴原はベッドから下りようとしたが、今度はしっかりと腕を掴まれ、引っ張られて押し倒される。

「おい。ここは教師の部屋で、お前は生徒だぞ」

「分かってる。けど、このチャンスは逃したくない」

「チャンスなんてない。今ならまだ冗談ということで許してやる」

「だめだって。だって、鈴原先生の乳首、俺にちょっと触られただけで、もう勃ってる」

「……不可抗力だ」

「違う。だってほら……」

Tシャツ越しに瀬野の掌が無理に押し当てられる。妄想の中では知らなかった体温が、今、じわりと鈴原の体に浸透した。

「おい……」

「ここ、可愛い。こんなに硬くして、不可抗力なんて言うなよ。気持ちいいよな？」

妄想の中と同じだ。こんな風に、ちょっと強気に責められて、乳首だけでなく陰茎もはしたなく勃起させる。

「……っ」

もどかしいTシャツ越しの愛撫。

布越しにかりかりと爪で先端を引っ掻かれるだけで、快感のあまり鈴原の体から力が抜けていく。

「くっ、う……っ」

「先生……こんなに敏感でどうするんだよ。俺以外の誰かに触られても、こんな風を感じて、無抵抗になるの？ 俺……もの凄く心配なんだけど」

俺を心配するなら、さっさと俺の上からどいて部屋から出て行けよ。

なんて言えずに唇を噛みしめる鈴原に、瀬野がなおも心配そうな声を出す。

「ほらここ。……興奮して乳輪までふっくら膨らんでさ……最初からこんな敏感だった？ それとも、誰かにここまで調教された？ こんな、すぐに硬く勃起する乳首なんて女の子だってそう

そういないよ？」

Tシャツを捲り上げられて、両方の乳首を乳輪ごとくにくにくにと揉み込まれて、背がしなった。他人の指に乳首を弄られるのは八年ぶり、体が瀬野の指を欲する。

「ねえ、誰かに調教された？ 昔のことだから、俺は気にしないよ？ だから教えて」

もっと触れてほしいのに、瀬野の指が乳首から離れていく。体の奥で快感の芯ができたのに、育つほどに触れてもらえずもどかしい。

「ふ、う……っ」

「それとも、先生が自分でずっと弄って敏感にした？ 先生もここの寮生だったんだよね？ ベッドの中で、一人で弄くってた？ すっごいやりたい年頃だもんね。我慢できないよね」

「違う……っ」

「じゃあ誰に、こんな風にされたの？ 教えてくれたらもっと気持ちいいことをしてあげる」

「ああ……っ！」

指の腹で勃起した乳首を撫でられると、泣きたいほど気持ちがいい。指の魔力に勝てなくて本当のことを口にした。

「高校のとき……っ、初めて付き合ったヤツに……乳首ばかり弄られたんだよ……っ」

何で俺が、こんなこと言わなくちゃならないんだよっ！ くっそ！ 俺の体の馬鹿野郎っ！

乳首が敏感なだけでなく、体中が快感に弱いらしい。

鈴原は唇を噛みしめて喘ぎ声を堪えながら、瀬野に乳首を責められる。

もっと強い刺激がほしいのに、じれったいほど優しく乳首を弄られて、思わずねだってしまいたい衝動に駆られた。

「凄い可愛い。気持ちいいのを我慢してる顔も、そのくせ素直な体も……。でも俺は今、先生の体をこんな風に調教した相手に嫉妬もしてる。すげえ……悔しい」

瀬野が目には涙を浮かべて「悔しい」と繰り返す。

ああヤバイ。その顔……凄く可愛い。俺が「お前にとって初めての男」じゃないから悔しいのか？ それとも……。

生徒に乳首を弄られるという恥ずかしい状態にも関わらず、鈴原は瀬野の頭を優しく撫でる。

「ねえ先生。俺、先生がゲイでよかったと思ってる。だってストレートより俺のことを好きになってくれる確率が高いし。だから……」

「可愛いことを言うなよ。ほだされるじゃないか」

「ほだされていいよ。俺、下手だって言われたことないから、先生のこと最高に気持ちよくしてやる。俺以外とセックスできないようにしてやる。ずっと一生……」

瀬野の顔がキスをしようと近づいてくる。

だが鈴原は彼の口を押さえて「だめだ」と言った。

「俺が教師でお前が生徒のうち、絶対にだめだ。俺が何度も言っている意味、分かるよな？ お前は賢いから……」

そっと口から手を離してやると、「俺のことを思い出にしたいのかよ」と拗ねられる。

「思い出にされたくないなら、卒業するまでずっとアピールしてろよ」

「……………わかった。今ここで最高のアピールするから。鈴原先生が授業中も疼いちゃうくらい凄いことするから」

「え」

これって、ここでほのぼの終わる、いい話じゃなかったのか？

瀬野は大人しく離れてくれなかった。

「待て、こら待て……っ、あっ、ひ」

何それヤバイ……っ！

いきなり乳輪ごと口に含まれて強く吸われる。何度も甘噛みされるたびに、びくんと腰が揺れた。恥ずかしいという気持ちよりも、他人に触ってもらえるのが嬉しくて、声を堪えることができない。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>